

鮫島惇一郎先生の思い出

千歳市 五十嵐 博

朝日カルチャーセンターでの鮫島先生の講義を聴いたのは何時だったのだろう。古いフィールドノートを引っ張り出してみた。1985年（昭和60年）だった。

初めて江別の山小屋を訪れたのは押しかけ弟子志願であった。鮫島先生の「北海道の樹木」の出版年だから1986年のはずである。この際にこの本を買った。本中の挿絵、長らく業務調査の帯状区植生断面図を描く参考にしていた。

原松次先生が室蘭市から札幌市に移られた1985年以降、鮫島先生の押しかけ弟子志願だった私は原先生に付いて歩く日々が増えた。鮫島先生にはたまにお会いすることがある程度、年賀状の付き合いも会社を閉めた今から10年ほど前から途絶えている。電話での先生の元気な声を聞いたのは数年前のような気がする。不肖の押しかけ弟子であった。

北方山草会誌の表紙、昔は坂本直行さんの絵だったが、ご遺族から頂いていた絵が30号でなくなり、鮫島先生の本「画文集・北ぐにの花暦(2008)」の絵を使うお願いをしたところ快諾を得た。会誌・北方山草の表紙は2014年31号：クルマユリからである。この際、顧問になって頂いた。

考えてみると朝日カルチャーセンターで歩いただけ、フィールドを2人で歩いた記憶はない。共にお酒を飲んだ記憶もない。江別の山小屋にお邪魔したのは38年前、遙か昔のことで、豊平のご自宅にお邪魔していなかった。鮫さんと辻井達一先生が呼んでいたのも、まねして呼んでいた。鮫島先生の本を通していろいろとお教え頂いた。朴訥な語り口が懐かしい。2024年1月10日の偲ぶ会では多くの方々に出会えた。ご冥福をお祈り致します。

鮫島惇一郎先生と雨竜沼の思い出

雨竜町 佐々木 純一

「迎春 平和な世界を!!」と手書きの宛名書きに「雨竜沼がなつかしいです!!」と添えられた年賀状。毎年一文が添えられ、先生はお元気の様だ、と言っていたのに...

鮫島先生との出会いは何時、どこだったのか、良く覚えていません。先生と植物観察やフィールドをご一緒したこともなく、でも先生から懇意にいただき

ました。

1995年の秋、電話をいただき受話器の声は「鮫島です」。北海道自然保護協会が発行するシリーズ本で、今回計画している「暑寒別・天売・焼尻の自然」に雨竜沼湿原の植物についての執筆依頼でした。先生も別項で書くと話され、私が尻込みをしていると先生は「雨竜沼の事を札幌の人に書かせて佐々木さんはそれでいい

のですか」と一喝され、湿原の植物を分筆して翌年3月に刊行されました。先生も一介の花好きに依頼するのですから肝が据わっています。私の人生を変えた先生からの電話でした。

この電話の前に先生の著書「草樹との出会い」を読み、衝撃を受けていました。「雨竜沼湿原を北海道の尾瀬と呼ぶことがあります。気になります。どうして北海道の雨竜沼湿原と呼ばないのでしょうか。みずから二流に甘んじる表現でないでしょうか」と結んでいます。当時は雨竜町も「北海道の尾瀬」とPRしており、先生の言葉は世相を戒めた苦言です。

この一件で私は雨竜沼湿原の自然史に係る古い資料を集めて全て調べ尽し、湿原生態系の保全に努めています。

先生が最初に勤務された頃の林業試験場北海道支場は札幌の美園6条1丁目にありました。木造2階建てで玄関ロビーから2階への階段沿いは大きなガラス窓で見晴らしが良かった。私は美園7条3丁目に住み小学校から高校までを過ごし、家からすぐの林試の柵を潜り抜けての場内は遊び場でした。ある時、先生と美園時代の話となり、庁舎内も見学自由でひょっとして先生とお会いしていたかもしれませんねなど、懐かしく話した思い出があります。50年も前の昔話です。

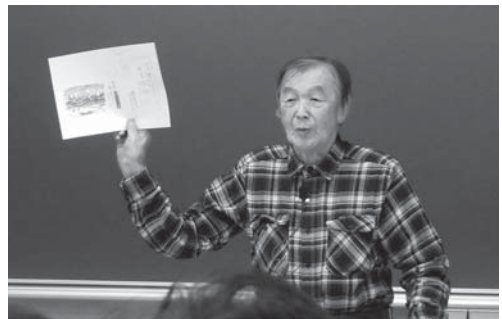
先生は多くの著書を残されました。植物のエッセー、写真集、画文集など10数冊はいずれも心温まる鮫島節の文章です。花たちと語り合い、若い頃から山行や田園から日常の風景などを撮りためて、何気なく添えられた素朴な回想や出来事など、どこか郷愁に引き込まれて時を忘れて読みふけ

ります。それは魔法です。

ミズバショウ日記(2005)には1988.6.25.の春の雨竜沼湿原で蛇行する沢で咲き誇るミズバショウの写真と、坂本直行さんと泊まった国領の小学校の思い出が綴られています。

画文集 北ぐにの花暦(2008)を上梓された翌年の夏に、滝川市美術自然館で原画展示会と、8月1日には先生が会場を歩きながら原画のエピソードなどを語る講演をされ、原画80点を寄贈されました。

2016年11月20日、北海道大学総合博物館で開催された坂本直行スケッチ展の講演会では、鮫島節は健在で直行さんとの日高や札幌での思い出など、先生の心は学生時代まで戻られたのでしょう、実に楽しみに話されていたのが印象的でした。写真はその時の鮫島先生です。



尽きる事ない鮫島先生との思い出は、雨竜沼湿原が結び付けてくれた先生との縁だと思います。先生の書籍には真直ぐな線上にローマ字でサイン、実直で飾らない先生らしいです。植物と山と自然を愛し、人間のゆき過ぎに警鐘を唱えた先生でした。「草樹との出会い」のあとがきの一文です。「人間は健やかな自然があってこそ、生かされるのだと謙虚にならなければなりません」。合掌